

# ハワイ語<sup>1</sup>における機能語同士の共起に関する調査

— ‘ana に関する議論の精緻化のために —

岩崎 加奈絵

kanaeiwasaki@hotmail.co.jp

キーワード：ハワイ語 ハワイ語統語論 機能語 ‘ana

## 要旨

ハワイ語統語論の議論において、「名詞」「動詞」等の用語はしばしば議論の混乱の源になってきた。また同時に、そうした内容語の区分を行うためには、句の中で現われる機能語が主要な判断材料となっているが、各機能語についての記述・考察は総じて十分とは言えない状況が続いている。

本稿は、広く機能語同士の共起を調査・分析し、各要素の性質を考察する取り組みの一環として、‘ana と他の機能語とがどのような共起関係を示すかに特に着目して述べる。またその際、統語論の議論の基礎的概念である「品詞」について、筆者の立場では、ハワイ語においては語の持つ性質・ラベルではなく、実際に使用される文や句のレベルにおいて統語的に判断されるものであることを示す。

## 1. 前提

### 1.1 ハワイ語の品詞<sup>2</sup>

ハワイ語の品詞・語類を記述する際、しばしば議論が混乱し、話が曖昧になる要因のひとつが、内容語<sup>3</sup>の下位分類である。Elbert and Pukui (1979) に見られるように、内容語にあたる要素は、基本的には名詞と動詞に二分され、他の言語の記述でよくみられる品詞（形容詞・副詞・助動詞など）については動詞に含めて考えられている。

また、特に話題になるのは、ひとつの内容語が動詞としても名詞としても等しく使用可能であるケースが多いという性質であり、先行研究の中にはopen classのものとして「名詞」「動詞」に加え「名動詞類（Noun-verb）」を認めるものもあった（Elbert and Pukui 1979:43）。このElbert and Pukui (1979: 43) では、名詞は「冠詞や特定の前置詞のあとに出現可能である語」、動詞は「アスペクトマーカのあとに出現可能である語」、名動詞類は「名詞化辞を伴わずと

<sup>1</sup> ハワイ語はオーストロネシア語族の東部ポリネシア語派に属し、孤立語とされ、「[述語]±[主語]±[目的語]±[その他の要素]」という基本語順である。また、ここでの「ハワイ語」は、主に20世紀前半までハワイ諸島で日常的に使用されていた時期の言語を指す。母音/ieaou/とその長母音/iēāōū/に加え、二重母音の/iuei eu ae ao au ai oi ou āi āu āe āo ēi ōu/, 子音/h, k, l, m, p, w[v~w], n, [ʔ]/を有している。

<sup>2</sup> 筆者は岩崎(2012)においても、名詞化を論じるにあたりハワイ語の品詞が統語的にのみ判断される、という「暫定的」な立場を提示した。言うまでもなく品詞は統語論の議論を行う上で要となる概念であり、本稿および今後の研究における用語の定義・使用の意図を明確にすべきであると考え、以前の立場からさらに本文に示したような考察を重ねた結果、(1)を明示するに至ったものである。

<sup>3</sup> ここでの「内容語」は、後述する「句」のヘッドになることができる語を指す。

も名詞としても一般的に使用できる語」というように、主に共起する要素から定義している。

一方、Schütz, Kanada and Cook (2005) は、辞書形式で各文法事項について簡潔に説明している研究であるため詳細な定義や記述までは含んでいないが、Nounの項 (Schütz, Kanada and Cook 2005: 137) ・Verbの項 (Schütz, Kanada and Cook 2005: 203) それぞれにおいて、ハワイ語の場合、「名詞」や「動詞」は意味・形態（接辞など）では規定することができないが、統語的には説明することができる、としている。

このSchütz, Kanada and Cook (2005) の指摘が、ハワイ語統語論の議論をする上で重要である。というのも、実際にテキストを見れば、句（またはその結合体としての文）のレベルでは、その句のヘッドがどの語であり、句全体が名詞句・動詞句いずれとして機能しているかについて判断することはできる。この判断基準は周囲の環境、すなわち、「共起する機能語の種類」「句構造の中に占める位置」である。

一方、もし語ひとつを取り上げた場合、そうした判断基準が使えないことになる。孤立的な形態論を持つ言語であり生産性の高い接辞もごく少ないハワイ語では、語形変化のような「語自体」の性質を判断基準とすることもできず、結果として動詞・名詞のいずれであるか、あるいはいずれでもあるというべきか等について、固有名詞などの特別な例を除けば判断できないといえる。

また、意味に着目しても、oli 「歌う・歌」のように、同じ音形に対して、意味的に関連し合っている動詞・名詞の両方の用法がある場合が多く、品詞を判断する基準にはしにくい。

もちろん、各語について名詞句・動詞句どちらのヘッドとして出現することが多いか調査するなど、数的に検討することも理屈の上では可能である。しかし、例えば数を出すとしてもどのくらいの差異があれば名詞・動詞のどちらとして認めてもよいか、どのくらいの出現数の割合で線引きをするかなどは恣意的にならざるを得ず、やはり解決にならない。

以上より、語のもつ性質として品詞を規定しようとする試みにはどこかで無理が生じる一方、統語的なレベルでならば、Schütz, Kanada and Cook (2005) が触れているように、判断に支障はない。よって、この「語の性質のレベル」「句（統語的）のレベル」を混同しないことを初めに明確にしておく必要があると考える。

よってここで、ハワイ語の品詞分類について以下のように提示する。

(1) ハワイ語の内容語は、

- ・レキシコンのレベルにおいては「動詞」「名詞」などのラベル付けをされず、基本的にはただ「内容語」というステータスを有するものとする
- ・句や文のレベルにおいては、動詞および名詞は、それぞれ周囲の環境（共起する要素と文・句中の位置）により判断できる
- ・よって、「動詞」および「名詞」という用語は「統語的なラベル」であり、各語彙素が個別に有する特徴をさすものではない。

## 1.2 動詞句・名詞句の句構造

先行研究によれば、動詞句は以下のような構造<sup>4</sup>である。

表1 動詞句の構造

否定辞 <sup>5</sup>	テンス・ アスペクト・ ムード	内容語	結合 目的 語 <sup>6</sup>	修飾語	受け身	方向詞	後置 代名詞
∅	∅		∅	∅	∅	∅	∅
'a'ole	ua		(具体的な語)	(具体的な語)	'ia	aku	ana
	e					mai	nei
	ke					a'e	ala
	i						
mai						iho	

各列の要素は、同一列内では共起しないとされる。実際の動詞句を以下に示す。例に見られるように、同時に現れる要素は多いとは限らず、最低限内容語だけでも句は成立しうる。

- (2) **Mai poina** ('oe...)  
NegImp FORGET 2sg  
「忘れるな」 (Hopkins 1992: 135)

- (3) ... **ke hele mai nei.**  
TA MOVE Dir Dem  
「【今】<sup>7</sup>来ている」 (Ho'oulumāhiehie 2006: 75)

- (4) **'a'ole i kāheha 'ia** ('o Hi'iaka mā...)  
Neg TA CALL Pass Sub H. pl  
「(ヒイアカたちは) 呼ばれなかった」 (Ho'oulumāhiehie 2006: 130)

次に、名詞句の構造を示す。

<sup>4</sup> 表1および表2については、Elbert and Pukui (1979) および 塩谷 (1999) に基づき、筆者が項目や名称を中心に改変を加えたものである。

<sup>5</sup> 代名詞の場合を中心に、動詞句の後ろにくる主語名詞句が否定辞の直後に入ることもある。

<sup>6</sup> 結合目的語は、典型的には動詞句の後に前置詞を伴って現われる目的語名詞句が、動詞句のヘッドの直後に現われる、一種の複合語である。

<sup>7</sup> 【】内は直訳ではない補足である。

表2 名詞句の構造

限定詞/否定辞	数	内容語	修飾語	方向詞	代名詞
( $\emptyset$ ) <sup>8</sup>	$\emptyset$		$\emptyset$	$\emptyset$	$\emptyset$
ka/ke	mau		(具体的な語) *	aku	nei
nA				mai	(ala)
kēia				a'e	(ana)
kēlā				iho	
kena					
ko (Poss)					
ka (Poss)					
kekahi					
he					
ia					
nei					
'a'ohe					
ua					

\* 修飾語は同時に複数個出現可能である。

名詞句の用例も以下に挙げる。名詞句でも動詞句の場合と同じく、実際の用例では句の中で同時に出現する要素が少ないことも珍しくない。ただし、動詞句が内容語1語でも成り立つことが多いのに対し、名詞句は基本的に限定詞など、何らかの前部要素が必要である。

- (5) **he keiki ikaika loa** ('o Kawelo...)  
 Det CHILD STRONG VERY Sub K.  
 「強い子ども」 (Elbert 1959: 33)

- (6) **ka he'e nalu mai** (o kekahi po'e kāne.)  
 Det SURF/SLIDE WAVE Dir Prep Det MEN  
 「波乗り」 (Ho'oulumāhie 2006: 108)

- (7) **kekahi mau wahi 'ē a'e**  
 SOME pl PLACE DIFFERENT Dir  
 「別のいくつかの場所」 (Ho'oulumāhie 2006: 2)

<sup>8</sup> 見出しの場合など、例外的に前部要素がないケースもあるため ( ) を付している。

またこれらとは別に、「*'ana* を含む句」がある。次節でも触れるが、機能語の*'ana* は一般に名詞化辞とされてきたため、動詞句中に位置（スロット）を割り当てて説明することが多い。しかし実際には、*'ana* と共起する内容語は、ほとんどの場合同時に限定詞とも共起する。なおかつ全体としては名詞句として機能しているため、受け身のマーカーを取れることなど動詞句と似た内部構造を持つ一方、それ自体の統語的機能としては名詞句に相当するといえる句である。よって、名詞句・動詞句とは分けて「*'ana* 句」と呼ぶのが相応しいと考える。

具体的な構造は次の通りである。

表3 *'ana* を含む句の構造

限定詞 (/否定辞)	内容語	結合 目的語	修飾語	受け身	<i>'ana</i>	方向 詞	代名詞
ka/ke		∅	∅	∅	<i>'ana</i>	∅	∅
kēia		(具 体的 な 語)	(具 体的 な 語)	<i>'ia</i>		aku	ana
kona						mai	nei
etc.						a'e	ala
						iho	

典型的な*'ana* 句は以下のようになる。この句では、限定詞と内容語、*'ana* が最低限の構成要素になる。

- (8) **ka**      **hō'ike**      *'ana*      **aku**      (iā      lākou...)  
 Det      SHOW           Dir      (Prep      3pl)  
 「(彼らに) 見せること」 (Ho'oulumāhie 2006: 89)

- (9) **kēia**      **mau**      **ho'oheno**      *'ana*      (a      kahiko)  
 Dem      pl      EXPRESS AFFECTION      (Prep      OLD)  
 「(昔の) このような愛情を示す【歌】」 (Ho'oulumāhie 2006: 112)

以上3つの句がハワイ語文の基礎的なパーツであり、さらに前置詞を多用してこれらの句同士をつなぎ、文を構成する。なお基本文の構造については、動詞を述語とする「動詞述語文」(VP-NP) と、名詞を述語とする「名詞述語文」(NP1-NP2) に大別される<sup>9</sup>。

### 1.3 機能語を再分析・記述する意義

以上見てきたように、ハワイ語においてある内容語が統語的に動詞（動詞句のヘッド）で

<sup>9</sup> さらに、ここに特殊な「存在文」を加える考え方もある。



あるか、名詞（名詞句のヘッド）であるか判断する際には、共起する機能語が主要な基準である。一方で、そうした機能語それ自体の性質については、ごく基本的な記述や典型的な用法等が示されるに留まり、詳細が未だ不明瞭なところが多い。

例えば、3節にて取り扱う‘ana<sup>10</sup>については、従来「名詞化辞」とされてきた。確かにこの語は、ポリネシア祖語の\*-(C)(a)nga に由来していると考えられ<sup>11</sup>、これ自体は名詞化接辞であったと見られている。しかしハワイ語の用例を見る限り、「動作性を帯びた意味をもつ内容語が名詞句のヘッドになるために必須の要素」ではない。1.1 で示した筆者の品詞に対する立場から考えれば「名詞化」という言葉で一般に言われるプロセスは想定せずともよく、先行研究に沿って考えたとしても、そもそも‘ana を含む句は、そのほぼ全てが名詞句に必須の要素である限定詞・否定辞と共起しているという点にも注意すべきである。これが‘ana と共起しているから名詞であり、そのために限定詞・否定辞が共起している」のか、それとも‘ana の有無にかかわらず統語的に名詞句として振る舞う語はほとんどが限定詞・否定辞と共起するのであり、‘ana は名詞性を示す以外の何らかの機能を担っている」と考えるのかは慎重な議論を要するものである。いずれにしても、「名詞化を起こす要素である」とするだけでは‘ana のもつ性質を十分記述したとはいえない。

現在のハワイ語統語論には、‘ana 以外にも後置代名詞、方向詞、前節での句構造には含めなかった「強意詞 (intensifier)」など、考察の余地が多分にある要素が残されている。こうした状況を考慮し、

- ①各機能語それ自体の性質をより詳しくにすることによる、文法記述の精度の向上
  - ②統語論における基本概念である「名詞」「動詞」を判断するための基準となる要素を、よりよく知ること
- という2つの観点から、機能語について改めて分析・記述を行うことが意義深いと考える。

## 2. データの性質

### 2.1 コーパスに含まれるテキスト

本研究では文献資料に基づき、‘ana をはじめとする各機能語のあらわれる用例を集め、分析・考察の対象としている。

対象とするテキストを選定するに当たり、主な基準としたのは以下の事項である。

- 1) 連続的な内容をもつ、まとまった分量があること
- 2) 原典を持たない（翻訳でない）こと
- 3) コーパス全体として見た際に、内容が出来る限り多様になること
- 4) 利用可能な英対訳があるものを優先すること

非文字言語であったことから、現在記録が残っていて、かつ公刊されているテキストの年代的幅はそれほど広くない。また、内容の多様性についても、1), 2) の条件を考えると民話・神

<sup>10</sup> こうした‘ana に関する問題点の指摘や、それを改善する試みについては岩崎 (2012) を参照。

<sup>11</sup> Chung (1973) 参照。

話に偏りがちである。これはハワイ語テキスト資料全体にかかる制約によるところが大きいいため解消が容易ではなく、このような偏りが注記するに留め、今後さらなる研究の際の課題とする。

また他に注意すべき点として、表記法の時代による変化およびバリエーションがある。具体的には、長母音を示す kahakō（マクロンで記す）と、声門閉鎖音を示す‘okina（逆向きアポストロフィー [‘] で記す）の有無や、一部の語の分かち書きの仕方である。初期の表記では kahakō も‘okina も基本的には使用されず、二重母音のように示したり（例：aa）、意味の区別上必要になる場合にのみ示したり（例：kou <2sg 所有> と ko‘u <1sg 所有>）している。さらに細かい点は個々の資料の記述者によるため、同音異義の識別には慎重でなければならない。

主たる検索対象の文書は、延べ語数で約 15 万 7 千語である。各資料の概略を以下に示す。

表 4 コーパスに含めたテキスト一覧

	発行年 (原本発行年)	タイトル	著者	のべ語数	表記法
A	1959 (1916-1919)	Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore	Samuel H. Elbert	約 20000	旧表記
B	2006 (1905-1906)	Ka mo‘olelo o Hi‘iakaikapoliopele	Ho‘oulumāhiehie	約 92200	新表記
C	2003 (1838)	Anatomia	Judd, G. P. and Esther T. Mookini	約 19000	旧表記
D	1983	Nā pule kahiko	Gutmanis, June	約 16500	旧表記
E	1951 (1889)	The Kumulipo: a Hawaiian creation chant	Beckwith, M. W. [ハワイ語テキスト 部は Kalākaua text に よる]	約 9100	旧表記

資料 A は Abraham Fornander による、ハワイ語での民話等のコレクションから数編を著者が抜粋したものである。もとの Fornander collection は 1860~70 年代にハワイ人による記録作業によって収集されたデータとのことだが、個々の物語については、データ採取者が誰であるかや、インフォーマント情報などは不明である。本研究ではこのうち冒頭 3 編（Iwa, Punia, Kawelo をそれぞれ主人公とする物語）を含めている。

資料 B は女神、ヒイアカイカポリオペレの物語である。姉にあたる女神ペレから命じられて、恋人・夫であるロヒアウイポのところへ赴く旅に始まり、旅の途中や、この件に関する姉妹間

での確執が原因で起こる様々な事件が紹介される。原本はHawaii Aloha紙に1905年7月15日から週ごとの連載で同年11月24日まで、その後1905年12月1日から1906年11月30日まで日刊のKa Na'i Aupuni紙で続きが掲載されたものである。編集にあたり表記は現代表記に改められ、別冊の英語版も刊行されている。文体は基本的に3人称文だが、読者に向けて書き手が呼びかけを行うなど、一部メタ的な部分もある。

資料Cは医師であるGerrit Parmele Juddにより、ハワイ語で書かれた医療に関する1838年刊行のテキストを原本とするものである。ハワイにおいて医療・解剖学に関する教育を行う目的から、American BoardがJuddにテキストを依頼したとされている。基本的には身体部位の働きや特徴の解説が中心である。テキスト選定に際しては、分野の偏りを意識して、ある程度まとまった分量を持ちつつ、民話等でないものとして含めたという意図もある。

資料Dは引用元がさまざまである祈禱文を集めたテキストであり、本全体には出典・バリエーション・固有名詞の脚注や、祈禱内容のジャンルについての解説など、英語による記載が多く掲載されているが、このコーパスにはハワイ語による祈禱文のみを含めている。

資料Eは、ハワイの創世を扱うチャント（詠唱文）で、文字記録としての原本はカラーカウア王の記録、英対訳はリリウオカラニ女王によるものが有名である。内容上、古代からの系統を示す性質をもつことから、固有名詞の羅列であるパートが多く含まれているが、文の体裁をとる場所も多く、用例として取り扱われるのはこの部分に当たる。

## 2.2 用例検索・整理の手法

2.1節で挙げたテキストをもとに、KWIC Concordance for Windows Ver.5<sup>12</sup>を使用して、用例とその前後の文脈を抽出した。

## 3. 'ana と各機能語の共起

本節では、ハワイ語における様々な機能語同士の共起関係を調べ、またそれらとその句のヘッドである内容語との関係についても考察し、各要素の性質を明らかにする取り組みの一部を提示する。今回は、前述の'ana と他の機能語とがどのような共起関係を示すかに特に着目する。なお、ここでの'ana の議論については岩崎(2012)で提示した傾向と一部重なる箇所もあるが、対象コーパスの分量を増加させても共通している点として以前の議論を補強するものとする。

### 3.1 'ana と「名詞句にみられる機能語」との共起関係

名詞句に見られる機能語と'anaの共起関係は以下のようである。

<sup>12</sup> 塚本聡氏公開。http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng\_dpt/tukamoto/kwic.html (2016年4月23日アクセス)。



表5 名詞句に見られる機能語と ‘anaに関する数

機能語	‘ana との共起数	総出現数	‘ana と共起する割合
<b>ka</b> (Det)	688	10013	6.87%
<b>‘a‘ohe</b> (Neg)	9	216	4.17%
<b>he</b> (Det)	27	2387	1.13%
<b>ua</b> (Dem)	2	692	0.29%
<b>kekahi</b> (SOME)	3	487	0.62%

それぞれの要素に出現頻度の差があるため、目安として割合も提示した。

次に、‘ana と共起する際に出現頻度の高い内容語とそれぞれの基本的な意味を、出現回数が多い順に提示する。なお、ua, kekahi, ‘a‘ohe は例数が少ないため、全ての語を提示してある。

ka	‘ōlelo 「言う」 pau 「終える」 hele 「移動する」 lohe 「聞く」 ‘ai 「食べる」 ‘ike 「見る」 holo 「動く」 ho‘omau 「続ける」 hana 「(何かを) する」 nīnau 「尋ねる」 hiki 「着く」 loa‘a 「得る」 noho 「住む・座る」 hānau 「産む」 hui 「繋ぐ」 huki 「引く」 lele 「飛ぶ」 hō‘ea 「着く」 make 「死ぬ」 pili 「結ぶ」 ho‘i 「戻る」 upa 「打つ」
‘a‘ohe	kā <sup>13</sup> 「打つ」 kū 「立つ」 ho‘okananuha 「不機嫌にする」 ‘apa 「遅らせる」 ho‘ohewahewa 「誤解する」 kama‘ilio 「話す」 ‘au‘a 「我儘な」 ‘ōlelo 「言う」 ‘olena 「否定する」
he	wili 「曲げる・ねじる」 kuehu 「かき混ぜる、波立たせる」 kaha 「滑降する」 ‘ōlelo 「言う」 lohe 「聞く」 kiani 「はね飛ばす」
ua	miki 「素早い」 pololei 「正しい」
kekahi	ho‘omaka 「はじまる」 huki 「引く」 ‘ōlelo 「言う」

ka の結果を見る限り、‘ōlelo をはじめとして、共起関係に関わらずそれ自体の出現頻度が高い内容語が順当に出ているように思われるが、he, a‘ohe や ua では必ずしもそうではなく、コーパス全体から見れば出現頻度が低い内容語が見られる。

一方、意味を見ると、「発言」「飲食」「移動」を示す語が多いが、そうでない語に関しても物理的な動きや動きの特性（曲げる・波立たせる・跳ね飛ばす・素早い etc.）と考えることができるものが多い。しかし、発言や移動の意味を持つ内容語はそれ自体の出現頻度が高く、‘ana やその他の機能語との共起が振る舞いに関係していると言うのは、この段階では難しい。

また、上で挙げた内容語と機能語の組合せは、大部分が‘ana を伴わないパターンも示している。‘ana が共起する割合が高いものと低いものがあり、ka ho‘omaka のように‘ana なしではほと

<sup>13</sup> 反対の気持ちを表す『間投詞』用法もあるとされる。

んど現われなかった組合せもあれば、he kahaのように‘anaが伴わないほうが多いものもある。多くの語はそれほど極端ではないか、そもそも内容語自体がコーパス中に数例しか出ていないかのどちらかである。

いずれにしても絶対的な例数が少ないため、傾向をまとめて提示するのは困難な事項が多いが、限定詞の中で‘anaとの共起しやすさのバラつきを示すデータであることは確かである。

### 3.2 ‘anaと「動詞句にみられる要素」との共起関係

一方、動詞句に見られる機能語<sup>14</sup>と‘anaの共起関係は以下のようなものである。

表6 動詞句に見られる機能語と‘anaに関する数

機能語	‘anaとの共起数	総出現数	‘anaと共起する割合
‘a‘ole (Neg)	0	478	0.00%
ua (TA)	0	1346	0.00%
‘ia* (Pass) <sup>15</sup>	0	398	0.00%

\*‘iaに関しては、今回提示するのはHo‘oulumāhiehie 2006からのデータに限る。

そもそも‘ana句は統語的には名詞句として働くものであるので、動詞句のみで現われる要素とは共起しないことが予想されており、結果はそれを裏付けるものである。

## 4. 今後の課題

本稿では、広く統語論の議論を行うための基礎として、ハワイ語の「品詞」のあり方と、それを判断する基準である機能語のより詳細な分析の重要性や、句の内部構造を提示したあと、機能語同士の共起関係の事例として、‘anaを具体的な対象として取り上げた。

今後は議論の幅を広げるため、

- ・ ‘ana以外の機能語にも注目し、取り扱う機能語を増やしつつ相互関係を精査すること
- ・ 機能語同士の共起関係と、それを含む句の内容語との関連について考察を行うこと

に取り組んでいく。特に方向詞・強意詞などの分析を進めることが課題である。

### 略号

1, 2, 3 人称 Det 限定詞 Dem 指示詞 Dir 方向詞 Pass 受動マーカ― Prep 前置詞  
pl 複数 sg 単数 Sub 主格マーカ― TA テンス・アスペクトマーカ― Neg 否定辞  
NegImp 否定命令マーカ―

<sup>14</sup> i, e など他にもテンス・アスペクトマーカ―はあるが、出現数・同音異義ともに多いため一例ずつの識別に作業上の困難があり、今回の表には含めていない。また、テンス・アスペクトマーカ―と冠詞とが同音異義として存在している ke については、本稿の表には含めていないが対象として調査中である。

<sup>15</sup> この表の数字には含めていないが、‘iaは実際には名詞句で出現するものも 80 例程度と少なくなく、‘ana 句はそのうち 22 例見られた。これらについては、今後‘iaの性質と合わせて論じるべき課題とする。

参考文献

- Chung, Sandra (1973) “The syntax of nominalizations in polynesian” *Oceanic Linguistics*, 12: pp. 641-686.
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui (1979) *Hawaiian Grammar*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Hopkins, Alberta Pualani (1992) *Ka lei ha‘aheo: Beginning Hawaiian*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- 岩崎加奈絵 (2012) 「ハワイ語における機能語 ‘ana」 『東京大学言語学論集』 32, pp23-36.
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1986) *Hawaiian Dictionary: Revised and Enlarged Edition*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 塩谷亨 (1999) 『ハワイ語文法の基礎』 東京：大学書林.
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho‘omalū Kanada and Kenneth William Cook (2005) *Pocket Hawaiian Grammar: A reference grammar in dictionary form*, Waipahu: Island Heritage Publishing.

用例抽出対象テキスト

- Beckwith, M. W. (1951) *The Kumulipo: a Hawaiian creation chant* [translated and edited with commentary by Martha Warren Beckwith; with a new foreword by Katharine Luomala], Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Elbert, Samuel H. (1959) *Selections from Fornander’s Hawaiian antiquities and folk-lore*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Gutmanis, June (1983) *Na pule kahiko: Ancient Hawaiian prayers*, Honolulu: Editions Limited.
- Ho‘oulumāhiehie (2006) *Ka mo‘olelo o Hi‘iakaikapoliopele*, Honolulu; Awaiaulu Press.
- Judd, Gerrit Parmele and Esther T. Mookini (2003) *Anatomia, 1838*, Honolulu: University of Hawaii Press.

## Co-occurrence of Hawaiian Functional Words

IWASAKI, Kanae

kanaiwasaki@hotmail.co.jp

**Keywords:** Hawaiian, Hawaiian syntax, functional word, 'ana

### Abstract

In Hawaiian linguistics, the functional words are primal grounds for deciding whether certain word is "verb" or "noun", putting aside the fact that such classification itself is problematic. Even though, it is recognized that none of those significant functional words have not been described or analyzed sufficiently. This situation is not ideal for the further syntactic discussion.

As a part of the broader research of Hawaiian functional words, in this paper, co-occurrence of '*ana*' (so-called "nominalizer") and other functional words are discussed. In addition, for the clarity of the current and future discussion, it is especially claimed that Hawaiian "parts of speech" can be decided not on lexical level but on syntactic level only; they can be decided only when the content words are actually used in phrases or sentences.

(いわさき・かなえ 東京大学大学院)